

## 尊厳死

先般、超党派の国会議員で作る「尊厳死法制化を考える議員連盟」が一つの法案の骨子を明らかにしました（3月23日付朝日新聞）。

それは、「終末期医療の意思尊重についての法案（骨子）」というもので、それによると

- ・「終末期」とは、適切な医療を受けても回復の可能性がなく、死期が間近な状態
- ・その判定は、2人以上の医師による
- ・延命措置を希望しないという意味が明らかな患者に延命措置を講じなくても、医師は責任を問われない

というもので、医師が患者から延命装置を外すような行為は想定していません。

「尊厳死」というのは、有体にいえば「人間らしい死」ということになりませんが、しかし現実には、「死期が迫っている状態」や「無駄な延命治療」とは一体どういうものなのか、更には、「人間らしく尊厳を保って死ぬ」とはどういうことなのか、議論は尽きません。

実際、医療体制や社会体制が不備のまま「尊厳死」が法制化された場合、重篤な患者や高齢者に死の選択を迫る圧力になりかねないと懸念する声もあり、障がい者や難病患者への差別に繋がりがねないとして反対している方々も多くおり、「尊厳死法制化を考える議員連盟」においても、今後引き続き検討を進めていくとしています。

尊厳死や安楽死といった問題は、古くて新しい問題です。

私が子どもの頃は、まだ「尊厳死」という言葉はなく「安楽死」という言葉が使われていたように思います。大人達が、重篤な患者が死にきれず苦しんでいるのを見て、何とか安楽に死なせてやれないものかと話しているのを聞いたことがあります。その頃は、「安楽死」の意味も分からず、子ども心に、「病院の先生も一生懸命治療しているのに、どうしてそんなことをいうのだろう」と思ったものです。

高校生になって、森鷗外の「高瀬舟」を読んだとき、はじめて「安楽死」の持つ意味を理解したように思います。

「高瀬舟」は主人公喜助と弟の物語です。喜助は弟と貧しい暮らしをしているのですが、その内弟が病気になって働けなくなります。弟は兄にだけ苦勞かけることに絶えられなくなり、とうとう自殺を決意し、兄が留守の間に剃刀で喉を切るのですが死にきれません。そこに喜助が帰ってきます。弟は兄に向かって剃刀を旨く抜いてくれれば死ねるだろうから「どうぞ手を借して抜いてく

れ」と頼みます。喜助は逡巡しながら遂に剃刀を抜いて弟を死なせてしまうというものです。

当時私は、この小説を読んで、喜助は果たして人殺しと云えるだろうか、これで罪人として島送りとなったのでは余りにも理不尽であり、可哀想ではないかと思ったものです。今もその気持ちに変わりはないのですが、一方では、喜助が捕らわれず無罪放免されたとしたらどうなっただろうかと考えます。

「高瀬舟」は、「安楽死」というものの持っている問題の難しさを示しており、喜助は裁かれて遠島となったことで、彼自身もまた救われたのかもしれないというのが、率直な感想です。

次に、「尊厳死」や「安楽死」の問題を私に突きつけたのは、1976年にアメリカで発生したカレンさんの事件です。

この事件は、カレン・アン・クインランさん（当時21歳）が友人のパーティーで酒を飲んだあと精神安定剤を服用して昏睡状態に陥り、意識がないまま呼吸も停止し、人工呼吸器につながれ、彼女の生命は機械の力でかろうじて保たれているという状態になります。それから3ヶ月後、彼女のご両親は「機械の力で惨めに生かされるより、厳かに死なせてやりたい」と主張しますが医師団に反対され、裁判になったというものです。

ニュージャージー州高等裁判所は、尊厳死を認めませんでした。州最高裁判所は「人命尊重の大原則よりも死を選ぶ個人の権利が優先されるべきで、治療を続けても回復の見込みがない場合には人工呼吸器を止めても良い」という画期的な逆転判決を下しました。

私は、カレンさんのご両親が、愛する娘の為にあって厳しい選択をされたものであり、その判断を深い同情と共に、今でも重く受け止めています。カレンさんの事件は、私に、「人が人らしく生き、人らしく死ぬということはどういう事なのか」を考えるきっかけを与えてくれたのでした。

誰しも、仮に自分が意識もなく、自発呼吸も出来ない。ベッドに横たわったまま機械の力で生かされているとしたら、「それでも私は生きているといえるのだろうか、また、生きている意味があるのだろうか」と問いかけずにはられないでしょう。この問いにどう答えるかは、その人の生き方や人生観、宗教観に左右され、答えは決して一つではないはずで。

自分自身のことなら、意識もなく、チューブに繋がれた状態であれば、「そうまでして生きていたいと思わない」と答える人が多いかも知れません。しかし、それが、自分の親やかわいい子どもであったらどうでしょうか。「どのような形であれ、生きていて欲しい」という願いと、「これ以上苦しませたくない」という思いとが交錯するに違いありません。

「人は如何に死ぬべきか」を考えるということは「人は如何に生きるべきか」を考えることでもあります。

「尊厳死」の問題から我々は、逃げるわけにはいきません。

（塾頭 吉田 洋一）